

NPO 法人 ふろんていあタウン工房

ふろタン通信

2022年1月17日 広報センター No. 41



「2021年の新春号です」という見出しで、昨年1月18日付で発信した通信37号には「正月7日に1都3県緊急事態宣言が出て、厳しい自粛ムードが当分続きそうです」と書いていましたが、新型コロナの変異株オミクロン株の拡大が今や世界中に広がっています。

2022年の「ふろタン通信」新春号は、昨年発信したN0.37~N0.40の見出しの言葉を辿った少し風変わりな通信でお届けします。

◆通信37号(2021.1.18)

正月7日に1都3県緊急事態宣言が出て、さらに厳しい自粛ムードが当分続きそうですが、活動を再開できる日を目指して「ふろタン通信」は皆さんから寄せられた情報の発信を続けていきます。通信37号は「ふろタン工房」の発起人の一人でもあり、発足時から7年間駒場東大前のご自宅を「ふろタン工房」の本部として使わせていただいていた安原昭子さんが昨年末12月20日にお亡くなり、2021年からの新本部は渋谷区恵比寿のびるまの竖琴ですという報告を載せています。

◆通信38号(2021.4.25)

「ふろタン通信」38号は、3度目の緊急事態宣言スタートの日の発信です。

2月1日のミャンマー軍事クーデターで日本在住のミャンマーの人たちがアウンサンスーチーさんの写真を掲げて国軍のクーデターに抗議の声をあげている新聞記事の写真と、4月18日の芝増上寺での僧侶とミャンマー人僧侶による、ミャンマーのクーデターで命を奪われた人々の鎮魂供養とミャンマーの平和を祈る集いの写真を載せています。



◆通信39号(2021.6.8)

通信38号はミャンマー情勢一色の通信になりましたが、本号はその続編です。ミャンマーの支援活動について一緒に考えましょう!と書いた通信39号は、1.5月18日~21日鎌倉のカトリック雪ノ下教会で開催されたビルマ応援の会主催の「ミャンマーの平和を願う写真展と、11.5月25日初版発行の「ふろタン年表2021」の販売収入をすべてミャンマーの民主化市民運動を支援する資金として届けることにしたふろタン工房の出版事業でない新たな出版活動、そして11.6月5日のミンガラパー・ユネスコクラブがカフェほれやあれで開催した「ミャンマーは今、私たちにできること」というジャーナリスト北角裕樹氏とゴールデンバガン店主のモモさんのお話を伺う会の3本立ての記事になっています。

◆通信40号(2021.9.11)

その後もコロナ禍の自粛ムードはさらに拡がり2021年は総会開催もままならない状態が続いています。と書いていた通信40号は、7月7日付のふろタン通信号外で今年は総会に代わる情報交換会を行うことを発信し、7月20日にメンバー全員が再任され引き続きNPO団体仲間との情報交換・交流を図って活動が続いていくことになりました。通信40号は最後にイスラム原理主義勢力タリバンのアフガニスタンの首都カブール制圧の報道を取り上げ、ミャンマー軍事クーデターに続く東南アジアでの分断、自粛ムードが暫く続きそうですが、めげずに元気に過ごしましょう!

《2021.11.9のびるまの竖琴からの電話》

2021年からのふろタン工房の本部「びるまの竖琴」の佐野貴美代さんから衝撃の電話がありました。店主のモーココさんが脳梗塞で左の手足が不自由になり店を閉めるというのです。驚いて10月22日にも昼食でモーココさんのカレーを食べながら楽しく話をしていたのと思いながら「びるまの竖琴」に向かうと、店の入り口には「20年8カ月続けてきた店を閉じます」というモーココさんから顧客の方々へのお礼の張り紙が張られていました。

そして昨年12月16日に閉店作業中の「びるまの竖琴」を訪ね、店の看板として飾ってあった竖琴の置物など、思い出の品を沢山受け取ることになりました。

今はモーココさんの症状が一日も早く回復し、またお会いできる日が来ることを願うばかりです。

◆2022年からの新本部の変更

新春からのふろんていあタウン工房の本部を、江東区新大橋の相田諭希典宅に移します。相田さんは、ふろんていあタウン工房の「二都物語」研究会のスタート時からのメンバー、2020年12月21日のふろタン技研コーナーに「URリンケージが取り組む海外事業」というレポートを投稿しています。

ホームページをご覧ください。

